横浜市史資料室　City of Yokohama Municipal Archives Reference Room

市史通信

【目次】
●一九三〇年代後半の横浜
●都市古謡「お茶場唄（節）」について
●一九五三年のヨコハマを巡る－又木誠八郎資料の写真から－
●平成二九年度展示会・関連講演会より
●複製資料紹介
飛鳥田一雄「市長日録」
●市史資料室たより

R・J・R横浜支部　1938（昭和13）年10月30日
後列右端が篠原あや　篠原あや資料

第31号
【発行日】2018年3月31日
【編集・発行】横浜市史資料室
〒220-0032
横浜市西区老松町1番地
横浜市中央図書館・地下1階
【電話】045-251-3260
【FAX】045-251-7321
【E-mail】
so-sisiriyou@city.yokohama.jp
【ホームページ】
http://www.city.yokohama.lg.jp/somu/org/gyosei/sisi/

一九三〇年代後半の横浜

一九三〇年代後半（昭和一〇年～一五年）は、日中戦争が始まる前後から太平洋戦争開戦までの期間に当る。戦争遂行のための総動員体制が、徐々に人々の生活を圧迫していった時代であった。しかし、人々の暮らしは一挙に戦争一色に染まっていったわけではない。震災復興を成し遂げて、華やかなモダニズム文化を享受した時代の名残がしばらく続いていた。つまり、モダニズム文化の名残をとどめつつ、戦争の影が忍び寄る時代であったといえる。

詩人篠原あやの写真アルバム

その時代の若者の姿が、ある女性の写真アルバムに記録されている。横浜を代表する詩人の一人篠原あやさんは、一昨年二〇一六年七月三〇日に亡くなられたが、生前に写真アルバム六冊を当横浜市史資料室にご寄贈いただいた。篠原あや（以下敬称略）は、一九一七（大正六）年一月に、中区翁町で生まれた。したがって、日中戦争をちょうど二〇歳の時に迎えたことになる。その頃の篠原と友人たちの写真が、数多くアルバムに貼られている。

一九三四年に女学校を卒業した篠原あやは、一年間病床に臥した。この間に篠原は、『令女界』（宝文館）という雑誌を愛読していたようだ。病気療養期間は、篠原を「完全な文学少女に仕上げてしまった」と自ら記している。以下、篠原に関する記述は、『横浜詩人会通信』に連載された篠原あや「私の周辺」による（報告書『横浜の文化人と戦後復興』横浜市史資料室、二〇一二年に抄録）。

『令女界』は女学生や文学少女を対象とした月刊誌で、川端康成が小説を連載したり、竹久夢二が挿絵を掲載するなどいわゆる「軟派」の雑誌といわれた。一九三五年秋に、全国の『令女界』読者によって読者グループ「R・J・R（令女純情連盟）」が結成された。病気から回復した篠原も、これに参加した。

篠原によれば、R・J・R（令女純情連盟）のキャッチフレーズは、「乙女の日を清く美しく、逝きては二度とかへらぬ乙女の日を、永遠にかざる我がグループ」であったという。全国各地に支部が組織され、横浜支部は篠原が中心となって呼びかけた。翌三六年一月に、伊勢佐木町松屋の二階休憩所を集合場所に第一回の集りがもたれ、続いて二月一一日には地元横浜の作家北林透馬邸（石川町）を訪れた。

北林透馬は、一九三〇年に中央公論社が募集した文壇アンデパンダンで「街の国際娘」が入選して脚光を浴び、一九三三年には「港の日本娘」が映画化されるなど、売り出し中の新進作家だった。R・J・R横浜支部に集う文学少女たちは、『令女界』にも連載を書いていた地元の若手作家と、その妻で

劇作家でもあった北林余志子の取り巻きとなっていった。

一九三七年七月には日中戦争が始まるが、R・J・R横浜支部の会員は、北林透馬邸や喜久家フルーツパーラー、伊勢佐木町の森永キャンデーストアなどに集い、季節毎にピクニックなどに出かけ、クリスマスには透馬邸でパーティーを開くなど、一九四〇年頃まで「ケンランたる娘時代」を過ごしたのであった。

また、『令女界』の姉妹誌『若草』（宝文館）の読者でもあった篠原は、全国のR・J・R会員や『若草』読者と交流し、時には横浜に招いて、港の見える丘公園などに案内したという。横浜にはすでに神奈川若草会があり、一九三九年一月二二日の集まりに篠原らも参加した。『若草』の読者には男性も多く、当時の若者にとって男女が交流する数少ない場であった。

北林透馬邸を訪れたR・J・R会員たち
1936（昭和11）年2月11日　篠原あや資料

北林透馬と篠原あや（左端）たち
年不詳　篠原あや資料

一方、翌四〇年一月、北林透馬は新聞記者牧野勲と共に海港文学の会を結成した。後の横浜ペンクラブの前身ともいえる、横浜の作家・詩人らの会であった。三月一〇日には、横浜桟橋帝国ホテル食堂で創立茶話会が開催され、篠原らR・J・R横浜支部の会員も、北林に誘われてこれに出席している。

この間、R・J・R横浜支部では、北林透馬を顧問に会誌『紫苑』を発行していた。創刊が一九三九年四月一〇日、翌四〇年一月一五日の八号まで刊行したが、そこで廃刊となってしまった。紙などの物資が不足し、値上がりして刊行を続けるのが困難となったせいだという。日中戦争はすでに長期戦の様相となり、戦争は日常の生活にまで迫って来ていた。

実は篠原のアルバムには、文学少女たちの写真に混じって、兵士の写真が貼られている。中国大陸らしい戦地での写真や、軍病院に入院中の写真で、不特定の複数の兵士たちである（報告書『横浜の戦争　市民と兵士の記録』横浜市史資料室、二〇一八年参照）。おそらく、慰問活動として手紙を送り、写真の交換をしたものと思われる。R・J・Rの活動だったのか、あるいは篠原も参加していた地元翁町の愛国婦人会の活動であったのかもしれない。

さらに、アルバムをよく見ると、R・J・Rの仲間たちも、たとえば満州の撫順支部や奉天支部、朝鮮の京城支部など、大陸や植民地に広がっており、彼女たちが家族と共に大陸方面に生活の拠点を移していたことがわかる。当時の日本人家族の暮らしが、大陸の戦争と無縁でいられない状況を示しているといえよう。

一九四〇年に入ってもしばらくの間、R・J・Rの活動は続いていた。同年三月一七日には、R・J・Rの東京・横浜支部合同で大倉山公園ハイキングを行い、四月二一日には劇作家岡田禎子と北林透馬を招いて、喜久家フルーツパーラーで『令女界』『若草』読者グループの東京・横浜合同会合を開いている。こうした交流の延長で、R・J・R京浜支部と横浜若草会を創立、北林透馬の他に評論家古谷綱武、小田原出身の詩人福田正夫を招き、東京の八重洲園で発会式を開催した。

そして、六月一六日には、R・J・R京浜支部の催しとして三ツ池にハイキングに行った。これには、北林透馬も同行している。しかし、篠原によれば、R・J・Rや若草会の集まりも、先の喜久家と八重洲園の集まり、そしてこの三ツ池ハイキングが最後だったという。

束の間の青春

戦時体制が強化されるなか、文学を楽しむ余裕はなくなりつつあった。北林透馬も、一九四一年の南部仏印進駐の後、同年一一月に徴用されて、陸軍報道班員としてビルマに派遣された。一九四四年頃には帰還したが、翌年五月二九日の空襲で、北林透馬邸も焼失する。篠原たちの青春の面影も、戦争によって失われていったのである。

当時の若い女性にとって、こうした束の間の青春は共有されていたようだ。たとえば、まさに「束の間の青春」と題された手記がある（前出報告書『横浜の戦争　市民と兵士の記録』所収）。女学校を卒業して花嫁修行中だったという二〇歳前の女性（現西区宮ヶ谷）が、一九三九年・四〇年頃の思い出を

語っている。

女学校を出てからは花嫁修業のため、お花にお茶、日本刺繍、琴、料理と習い事の日々だったという。その合間には、音楽好きだった兄が、土曜日毎に友人を家に招き、彼等が持ち込んだギターやマンドリンの合奏、それにレコードを一緒になって夜の更けるまで楽しんだ。また、兄たちに葉山や箱根などにドライブに連れて行ってもらったこともあったという。野に咲く花で花束をつくり、写真をとってもらい、「わけもなく、はしゃいで、只々楽しさ一杯に青春を謳歌」したのだった。

しかし、戦争の影はしだいに忍び寄ってきた。兄の友人たちが次々と軍隊にとられ、戦争を身近に感じるようになっていった。そして、自分たちの服も長袖の着物からセルや絣でつくった「筒袖の上着とモンペ」に変わり、慰問袋に千人針、勤労奉仕、出征兵士見送りと、戦時体制に組み込まれていったのである。弟は学徒動員で「勉強どころではない、可愛想な学生時代であった」。妹も、「戦争の悪化で何一ツ習い事」もできなかった。

森永キャンデーストアのマッチラベル　鈴木精一家資料

一九三一年の満州事変から、兵士たちの出征は続いていたが、一般市民にとって戦争はまだ身近なものではなかった。一九三七年七月に日中戦争が始まって、徐々に戦時体制が整えられていくなかでも、まだ戦争は人々の日常生活すべてを覆い尽くしていたわけではなかった。ここに、戦争が始まる前後の一九三〇年代後半という時代の特徴の一端を見ることができる。

日中戦争開戦前後の家族の暮らし

では、若者ばかりでなく普通の家族の暮らしはどうだったのだろうか。一九三〇年代の日記や手記は多くはないが、『横浜の空襲と戦災』2　市民生活編（横浜市、一九七五年）に、いくつかの日記が掲載されている。その内、日中戦争が始まる一九三七年の記述があるのは、川口金太郎の日記だけである。『横浜の空襲と戦災』は抄録なので、原本のマイクロ複写から紹介する。

川口の詳しい経歴は不明で、県職員とのみ記録されている。日記の文面から小学校の職員で、自宅は神奈川区子安にあったと思われる。川口の一九三七年の日記を一読して感じることは、戦争の推移が日常の生活にあまり影響を与えていないことである。もちろん、知人の戦死や出征見送り・区民葬などの記載があり、大陸での戦闘は日常のこととして意識はされている。しかし、自分の暮らしぶりは変えない。

盧溝橋事件を発端に日中戦争が始まった七月七日には、「支那事変ノ火ブタ切ラル」と記す一方、学校の夜学の後、職場の仲間らしき二人と共に伊勢佐木町の信濃屋で飲み、金港ホールを見物して一時（夜中であろう）に帰宅している。

こうした暮らしぶりは、日中戦争開戦前も後も基本的には変わりない。月に数回、伊勢佐木町に家族と共に出かけて買い物や食事をし、映画館で映画を見る。どこかの行き帰りにも、日常的に「伊勢ブラ」をしたと記されている。他に、野毛山公園や花月園にも出かけた。また、七月二一日に横浜公園球場で行われた巨人軍対タイガースのプロ野球の試合を見るなど、たびたび野球観戦にも行っている。

一方、一〇月になると、伊勢佐木町へ出かけた際に、ニュースを見たという記載が出てくる。推測だが、日中戦争のニュース映画を見たのではないだろうか。ニュースを見るという記載は、翌年も続く。そして三七年暮から一九三八年に入ると、戦死者出迎えや、白衣の帰還出迎えなどの記載が増え、出征将士家族慰安に関わる記述も目立つようになる。また、国民精神総動員強調週間・銃後援強化週間など、日常生活に明らかに戦時色が現れてくる。

一九三八年も、伊勢佐木町での買い物、映画、伊勢ブラ、そして花月園など普段の暮らしぶりは変わらない。また、箱根の温泉へ行ったり、娘が山梨にハイキング、夏には海の家（海水浴）へ行くなど、行楽も楽しんでいる。しかし、こうした娯楽・行楽の内容に戦争の影が浸透してくるのである。

たとえば、二月五日に伊勢佐木町野沢屋に出かけたが、このときには慰問袋を発送している。また、二月一〇日には出征将士家族慰安の映画を見、一二日には花月園で同じく出征将士家族慰安の相撲見物をしている。三月九日には東日従軍記者の講演があり、そこでは津田部隊の映画を見ている。津田部隊とは甲府の歩兵第一四九連隊で、上海など中支方面に派遣され、激戦を戦った神奈川の地元部隊である。

また、五月一〇日の徐州陥落の旗行列、一〇月二八日の漢口陥落の旗行列など、大陸の戦争の推移が、眼に見えるかたちで日常の生活の場に現れてくる。二月と九月には、防空演習も行われた。このように、一九三七年段階には、普段の生活に大きな変化はなかったものの、翌三八年以降、日常生活と娯楽・行楽の内容が徐々に変質していったことがわかる。普段の暮らしは維持されつつも、戦争の影が迫って来た時代、それがこの一九三〇年代後半といえる。

（羽田博昭）